

荒野

Heath

ナガイヒテミ

人物

父 走って、通り過ぎる。  
声2 何で、  
父 ようわからんけど、  
声2 わからんの、  
父 うつるけんぢやろ。  
声2 うつる、  
父 そう。  
声2 何が。  
父 それもようわからん。  
声2 誰がそがなこと、  
父 さあ。  
声2 さあ、  
父 Nothing.  
声2 え。  
父 Nothing.  
声2 だから何。  
父 知らん。  
声2 そんな、  
父 その家の、  
声2 ああ。

父 長女  
次女  
声1 (＝男)  
声2 (＝女)

父 ええ家、悪い家、つちゅうんがあつた。  
声2 悪い家、  
父 村に、昔。  
声2 悪い、て何が。  
父 鼻つまんで、息を詰めて、  
声2 え。  
父 前を通るとき、  
声2 前を、  
父 そう。  
声2 どこの、  
父 その家の、  
声2 ああ。

寒風の吹きすさぶ音。

特別養護老人ホーム、トウリーハウスのロビー。

テーブル、椅子、ソファなどが置かれ、受付カウンターがある。

父 え。何ぞ言つたか。

受付カウンターの上にノートパソコン。手提げ袋を提げた父、カウンターの前に立つてゐる。カウンターの内側に介護士の制服姿の女。

女の背後は事務室で職員らの机が並んでゐる。人物はみなマスクを

している。

父 画面に耳を近づける。

女の背後は事務室で職員らの机が並んでゐる。人物はみなマスクを

している。

父 聞こえんが。もつと大きな声で言つてくれ。

女 (父に) 少々お待ちください。

女、パソコンを操作する。モニター画面を父の方に向ける。

父、背をかがめマスクをはずしてモニターに顔を近づける。

父 おゝ。

父 元氣なんか。ご飯は食べよんか。どこに居るんだ。え、そこはどこぞ、

を

女、眉をひそめて、パソコンを少し父から遠ざける。

父、パソコンを引き寄せ、なおも手を振りながら、

父 お時間です。

父 わかるか。わしがわかるか。

女 わかるか。

父 ようにご飯食べいよ。また来るけんの。明日も来るけんの。

女 あの、

父 (画面に) 治つたらまた家に帰ろ、の。

父、画面に向かって) これ誰ぞ。わかるか。え、わかるか。わかつたんか。

父、画面に向かって) これ誰ぞ。わかるか。え、わかるか。わかつたんか。

女、パソコンを終了して、たたむ。

父、その手元を見ている。

父 話があるんだやが。

女 すみません、マスクを。

父、マスクをしかけるが、またはずして、

父 あの、誰やらのう、  
女 はあ。

父 ケアマネの、

父 平野、ですか。

父 あゝ、平野さん。

女 平野はちょっと手が離せません。

父 ここで待たせてもらうけん。

父、ロビーのソファに座る。

しばらく後、男、受付カウンターからロビーに出てくる。

顔をしかめている。

男 面会はお済みたんでしょう。

父 面會

男 今、

父 面會はしとらん。

男 さつき、パソコンで、

と、受付カウンターを振り返る。

父 あがな、機械やか。

男 今は、

父 どこに居るんやらもわからん。

男 いつもどおり、二階に、

と、天井を見る。

父 顔を見んことにや、

男 しううがありませんけん、今は。

父 ものも言へんし。

男 ものは言えますけん。

父 賴りのうて。何も言はんけん。<sup>なん</sup>

男 お元気にしとりますけん。

父 直に會わんことにや。

男 あればおさまつたら、また。

父 話があるんだやが。

男 はあ。

父 あの、誰やら、あの、

男 はあ。

男、苦り切った顔。

男 平野は今忙しいて。  
父 あんたは話を聞いてくれんけん。

男 話なら、  
父 平野さんに會ふまでは帰らん。  
男 迷惑しとるんですけど、こつちは。

父 迷惑て、

男 面会はお済みたんじやし、

父 ほぢやけん、面會は、

男 お宅だけじやありませんけん、ここは。

父 そがなことはわかつとる。

男 ほんなら、

父 話がある、て言ひよんだやが。

父 書類のようなものを取り出し、

父 ここいちやんと書いてある。「ご意見ご要望があればお申し出ください」

男 ほじやけん、それは、

父 あんたのう、

男 はあ。

父 わしや、あんたが若い頃から知つとるが、

男 先生、

父 そがに偉いんか、あんたは。役場の叩き上げから、この、

男 先生、

と、あたりを見回す。

女 カウンターから出て、男の脇に立つ。

女 施設長、そろそろお時間です。

男 ああ。(父に) ほんなら、

父 待て。

女 会議がありますけん。

父 まだ終はつとらん、話が、

男 先生、

父 うん、

男 あんたこの頃、何やら、

父 何ぞう、

男 ちいと診てもうたら、

父 何、

男 町の、病院で。

父 病院、

男、女とともに中に入る。

父 まだ話があるんだやが、

声1 Nothing.

父 え。

声2 Nothing.

父 誰ぞ何ぞ言つたか。

声1 たわいもないことを。何にもならんわい。

声2 何にもならんものは何かにならんかい、小父たん、

声1 はて、ならんぬ。無からは何物も生ぜん道理ぢや。

父 よい（かけ声）、誰ぞ居るんか。何ぞ言ふたか、よい。

声1 微生物と結び付ける考え方は、数十年前からあつたが、主流から外れるとされた。

声2 しかし今、研究者たちは、この関係を探り始めている。

父 よい、誰ぞう。どこに居るんぞ。

長女 お父さん。

父 何しにきたんぞ。

かがんで体を丸める父。  
外に車の停まる音。長女が入つてくる。

父 よい、黙れ。頭が痛い、頭が痛いんだや。

耳をふさぐ父。

声2 これが脳の中で凝縮してアミロイド斑を形成し、炎症を引き起こして、

ニユーロンを殺すと考えている。

声1 しかし微生物感染がアミロイド斑の產生を引き起こし、

父 やかましい。よい、黙れ。

声1 米食品医薬品局FDAは七日、製造販売を条件付きで承認、

声2 関連各社の株価は高騰、

声1 FDAは効果などを調べるよう求めており、十分に確認できなけれ

ば承認を取り消す可能性もあると、

父 誰が言うたんぞ。

長女 電話がかかってきた。

父 いらんことを、

長女 帰るよ。

父 勝手に歸れ。

長女 迷惑になるけん。

父 關係なかろが、お前に。

長女 あるよ。

父 歸らん。

長女 お父さん、

父 あの、誰やら、ケアマネに、

長女 平野さん。

父 まだ會うとらんのぢや、平野さんに。

長女 もうよかろ。

父 ようない。話があるんぢや。

長女 平野さんにや、これまでさんざん迷惑を、

長女 あのね、

父 お金を、

長女 ほじやけん、それは、

父 りんごも一箱。

長女 お父さんが勝手に、

父 特上のりんごぢや。

長女 持つて帰つた、私が。

父 え。

長女 りんご。施設長に言われて。

父 どう云ふことぞ。

長女 ほじやけん、そういうこと。

父 平野さんに送つたんぢや、わしは。

長女 いかんのよ、ものやお金を送つたら、

父 そいでお前、りんごをどしたんぞ。

長女 学校で配つた。

父 なしや言はんかつたんぞ。

長女 怒るけん。

父 どしてそがなことしたんぞ。

長女 当たり前じやろ。

父 お前、

長女 昔とは違う。

父 何が、

長女 病院じやないし、ここは、

父 わかつとる。

長女 わかつてない。

父 何が、

長女 何遍も言ったのに、

父 何を。

長女 介護士さんのこと、「看護婦」で、いつも、

父 看護婦は看護婦ぢや。

長女 違うんよ、昔とは。

父 何が違ふんぞ。

長女 いろんなこと。

父 いろんなことで、何ぞう。

長女 昔はあつたかも知れんけど。

父 昔て、

長女 付け届け、とか。お医者さんや看護師さんに、

父 前に、お母さんの入院しどつた、

長女 あの病院でも、お菓子やなんか渡して。先生や看護師さんやお掃除の

人らに。

父 喜んでもうた。

長女 人から「ありがとう」言われたいだけじや。

父 何。

長女 感謝されたいだけじやろ。

父 何を。

長女 自己満足。

父 何のことぞ。

長女 第一、ここは病院じやなから。

父 大して變はらんからが。

長女 自分とこだけ良うしてもらお思うんは、

父 お禮するんはあたり前ぢや。世話になりよんぢやけん。

長女 何か渡したけん、ああせい、こうせい、言うんは、

父 話したいだけぢや、平野さんと。

長女 お父さん、

父 平野さんに會ふまではここを動かん。

長女 言うたろがね、

父 何、

長女 りんごは私が持つて帰つた。

父 お金ば、

長女 お金は平野さんがお父さんに突き返した、その場で。

父 違ふ。

長女 お父さんの勘違いじや。

父 勘違ひやかしやせん。

長女 ほんなら忘れたか、

父 お前、見よつたんか。

長女 聞いた。

父 誰から。

長女 平野さんからも、施設長さんからも。

父 平野さんは、

長女 帰るよ。

父 いや、

長女 迷惑なだけじゃん、ここにおつても。

父、動かない。

長女、父を引きずり出そうとする。

父、大の字に寝る。

声1・2 (節をつけて) 今歳や阿呆の外れ年だよ、

聰明な手合りこうが阿呆まひになつて、

智慧の使ひやうもご存知ない程、

手ぶりも、そぶりも馬鹿むづめらしい。

父 よい、誰ぞう。何ぞ言ふたか。誰ぞ何ぞ言ふたんか。

声1 小父お父たん、おれはお前まひが女児むすめッ子こらを阿母おつさんかにしたんで、それで唄おうが好きになつちました。

父 出でこい、誰ぞう、出でこい。

声2 おれはもう阿呆まひを止めつちまひたい。

父 止めたらええがあ。

声1 でも小父お父たん、おれアお前まひになるのは厭だ。

父 どしてぞ。

声1 お前まひは智慧りやうはしの両端りょうぱうを削くずつちまつて、

声2 まんなかがらんどう中央ちゅうおうを空洞くうとうにしつちまつた。

父 何を、

長女 お父さん、

父 何ぞう、

長女 何わけわからんことを、

父 何のことぞ。

長女 もう、ええけん。

と、暴れまわらんとする父を、長女ちやんずるずると引っ張つて連れて

行ゆこうと奮闘ふんとう。父、引きずられながら叫んでいる。

父 どこに居るんぞ。

長女 お父さん、

父 わしはここを居るけんの。

長女 ちやあんと一階をで、

父 二階、

長女 具合がい良うして貰ういよんじやけん、お母さんは。

父 聞こえるか。どこに居るんぞ。また来るけんの。

数日後、特養のロビーの椅子。

長女、次女が並んで座っている。

座り直す次女。

次女 私、やつぱり、

長女 何、

次女 はずした方が、

長女 帰つて来いでもええ、て。

次女 そんな、

長女 と、腰を浮かせる。

長女 もうバレとるよ。

次女 え。

長女 住所書いたら、前に面会に来たとき。

次女 ああ。

長女 うん。

次女 ほいでも、

長女 知らんふりで。

次女 良かろか、

長女 言うてあるんじやけん。

次女 何、

長女 姉妹二人で来る、て。

次女 うん。

長女 言うたのに。

次女 何、

長女 帰つて来いでもええ、て。

次女 そんな、

長女 何。

次女 せつかく年休とつて、私。

長女 言うたんじやろ、お父さんも。

次女 何、

長女 電話で。（父の口真似）「どうぞあつたら、あそこぢや、て皆に言はれる」

次女 ああ。

長女 （父の口真似）「どうぞあつたら、あそこぢや、て何が。」

次女 どうぞあつたら、て、何が。

長女 何やらかやら。あそこの家に、他所から帰つとる者がおる、ゆうだけ

で。

次女 ほいでも、

長女 何。

次女 放つとけんから、お父さん。

長女 差別をするな、て。

次女 え。

長女 有線じや、そう放送しよるようなけど。

次女 何。

長女 もしあれが出ても。

次女 ああ。

長女 今はまだ、ないけど。

次女 うん。

長女 もし出ても、村長が、差別をするな、て。

次女 差別、ね。

長女 二週間ルールもあるし。

次女 何。

長女 言うてなかつた、

次女 聞いてない、と思う。

長女 県外から來た者もんや、

と、次女を指し、

長女 言うてある、て、言うたろ。

次女 二週間ルールは、

長女 まあ、それは、

次女 建前、

と、自分を指す。

長女 二週間はそうゆう、関係の人とは会えん、て。

次女 関係の人、

長女 ケアマネさんや介護士さんや社協の人や、

次女 シヤキョウ、

長女 社会福祉協議会。

次女 そ、うなん。

長女 うん。

次女 じやのうて、

長女 何。

次女 二週間、

長女 らしい。

次女 私、やつぱり、

と、腰を浮かしかける。

長女 そうとばあいも言へん。

次女 どつち、

長女 ずっと会へんままらしい、ケアマネさんも介護士さんらも、県外におる娘さんや親類に。

次女 私は別に、

長女 何。

次女 かかってないけん。

長女 潜伏期間ゆうもんがある。

次女 姉さん。

長女 何。

次女 疑うん、

長女 いや、

次女 うん。

長女 と言うか、

次女 何。

長女 わからんから、誰でも、

次女 何が。

長女 もし、罹つとつても。

次女 そりや、まあ。

長女 忙しいんじやろ、あんたも。

次女 そりや、まあ。ほじやけど。

長女 うん、

次女 姉さんだけに押し付けるんは、

長女 しようがない。近くにおるんじやけん。

次女 仕事は、

長女 忙しいよ、ずつと。

次女 四、五日泊まって、話でもして、と。

長女 まあねえ。

次女 洗濯して、温ぬくいご飯作って。

長女 うん、

次女 そしたらちょっとは落ち着くと思たんじやけんと、お父さんも。

長女 気いついとんじやろ、あんたも。

次女 何。

長女 もう過ぎてしもたような、そういう段階は。

次女 そういう段階て。

長女 普通の話、ゆうか会話ちゅうもんが、なかなか、

次女 うん。

長女 ああ。

次女 何。

長女 あれ、さえ来んかつたら、ねえ。

次女 そがなこと言うても、

長女 もうちよつと、どうにか。

次女 お父さん、

長女 うん。

次女 まあねえ。

長女 体操教室や朗読教室があつた頃はねえ、

次女 うん、

長女 皆に褒めて貰えて。先生、いつも元気なのう、て。

次女 ああ。

長女 まあまあご機嫌で、

次女 うん。

長女 そういう繋がりも切れてしまつて、

次女 ほうじやね。

長女 人と話すことも無くなつて、

次女 しようがないよ、今は。

長女 ここも、ねえ。

と、見回して、

長女 前みたいにここで。普通にお母さんに会えよつたら、ねえ。もうち

よつと、どうにか、

次女 ほいでも。

長女 何。

次女 怖いし。

長女 え。

次女 あれ。

長女 クラスター、とか。

長女 まあ、ねえ。

次女 対応でけんかろ、ここじや。

長女 うん。

長女 うん。

次女 村でも、県でも。

長女 ほじやけん、あんたは帰つて来ん方が、

次女 もう、

長女 何。

次女 さつきからくどくど、くどくど。

長女 別に、私は、

次女 お父さんみたように、

長女 ちよつと、

次女 何、

長女 だいたい、あんたが、

次女 姉さんは昔から、



次女 うん。

長女 ただ、施設や、近所に迷惑だけは、

次女 もうかけどるじゃないか、充分。

長女 ほいでも、もうこれ以上は、

次女 まあねえ。

長女 お母さんのためにもねえ。

次女 今日は、そいで、

長女 まあ、ずうっと、積み重なつとるもんが、

次女 お父さんの、

長女 いろいろとねえ。

次女 文句を、

長女 たぶん。注意、というか。

次女 注意されてもねえ、

長女 こっちが悪いんじやけん、お父さんのことは。

次女 ほいでも。

長女 うん、

次女 どうする、

長女 何、

次女 お父さん、

長女 どうする、て。

次女 閉じ込めとくわけには、

長女 まあねえ。

次女 首に縛つけとくことも、

長女 でけんねえ。

次女 困ったねえ。

長女 私らだけなら我慢もするんじやけど、また施設やよそに迷惑を、

女 がやつてくる。

女 大変お待たせしました。

長女、次女、立ち上がり、お辞儀をする。

長女 母がいつもお世話になっています。

次女 この度は父がどうも、大変なご迷惑を。

長女 申し訳ありません、いつも。

女 いえ、まあ、どうぞ。

女、椅子を指す。長女、次女、座る。

女、テーブルを挟んで二人の向かいに座る。ちょっと椅子を引き、  
距離をとる。身じろぎをする次女。

女 (長女に) 先日の件ですが。

長女 ええ。

女 お父さまは、「平野がお金を盗った」とおっしゃるんですよ。

次女 「盗った」、

女 はい。

次女 あの、

女 はい。

次女 父は、「盗った」ではなく、「あげた」と。

女 盗った、と言われました。

長女 ケアマネさんにお金を渡そうとしたのは父の落ち度です。

女 平野はその場でお返ししたんです。

長女 よくわかつています。

女 お父さまは平野が受け取ったと思い違いをされて、

長女 ええ。

女 それがいつのまにか「平野がお金を盗った」と、

次女 あの、

女 はい。

次女 父は、母のことを思う一心で、

女 物やお金で、入所者さんが優遇されることはありません。

長女 ええ、それはもちろん。

次女 すみません、なにぶん、父はもう九十四で、認知の方も、だいぶん、

女 にしても、「もう今回は」と、施設長も、  
長女 はあ。  
女 退所していただくことになりました、お母さまに。

息をのむ一人。

長女 退所、

次女 退所、つて、

女 まあ、滅多にないことなんですが。

長女 待ってください。あの、

女 はあ。

次女 それは、父のせいですか。

女 はい。

次女 今回の、

女 これまでにも、いろいろと。

次女 はあ。

女 (長女を指し) こちらはよくご存知だと思いますが。

長女 それは、

女 お母さまにもつとりハビリをして欲しい、とか。

長女 ええ。

女 お食事のこととか。

次女 はあ。

女 よくわからない個別の要求を書いてきて、文書で回答するように、  
と何度も。

長女 ご迷惑をおかけして、

女 ここは特養ですし、

長女 はい。

女 応じられることにも、やはり限界が。

長女 ええ。

女 何度も申し上げましたが、

長女 はい。

女 人手も少なくて、

長女 ええ。

女 まして今は、あれ、で。

次女 ええ。

女 大変で、何もかもが。

長女 ですよね。

女 消毒とか、除菌とか、前にも増して、

長女 わかります。

女 お一人の感染者も出さないように、と。

長女 ええ。

女 そんな中で、お父さまは何時間も、ロビーで、

次女 (長女に) 何時間も、

長女 (次女に) うん、まあ。

女 こないだの文書に回答を出さんと帰らん、とか。

次女 すみません。

女 平野も誠心誠意お答えはしたのですが、

長女 ええ、それは。

女 その答えがまた<sup>（</sup>氣に入らないと、お父さまは。

長女 申し訳ありません。

次女 父はわかつていなくて。施設と病院の違いとか。

長女 母に、早く元気になつてここを「退院」して欲しいと思っているみ

たいで、

次女 介護保険制度のことも、特養のこともわかつてなくて。「なしや（な

ぜ）お母さんに會はさん<sup>（あ</sup>のぢや」、ばっかりで、

女 そのへんはご説明させてもらつたのですが、私も、平野も。

長女 ええ。

女 平野はお宅まで伺つて、何度も、丁寧に。

長女 ほんとにお世話になつて、

女 その時は納得したようなことをおつしやつても、あとで覚えておら  
れないらしくて。

次女 すみません。

長女 あれが来る前は、毎日ここに通つて、父は。

女 ええ。

長女 母に会えるのを楽しみに、

次女 その頃は何とか保つていたようなのですが。父の、気持ちも。  
女 ご主人が健在なのは、お母さまだけです。

長女 はい。

女 ほかの人所の方は、みなさんおひとりで、  
長女 ええ。

女 歩ける方もお母さまだけで、

長女 こちらのリハビリのおかげです。

次女 本当に。

長女 また靴が履けるようになるなんて。

次女 (長女に同意して) ねえ。

女 ほかはみなさん、車椅子で。

長女 そうですね。

女 廊下と食堂を、手摺り伝いにのべつ歩き回つて。家に帰る、帰りた

い、ばかり言つておられます。

次女 誰も会いに来んけんね、あれのせいで。

女 他の人のベッドで横になつておられたこともあります。

次女 そうなんですか。

女 夜も、眠れないで歩き回つておられる」とも多くて。

次女 お母さん、かわいそう。

女 精神科に、お母さまの安定剤を取りに行っていただいていますが。

ふた月に一度、お父さまに。

長女 ええ。

女 そのとき施設は、お母さまの症状を記録した文書を作成してお渡ししています。病院の先生に読んでいただくように。

長女 ああ、ええ。

次女 文書、

長女 (次女に) 病院の先生に提出する書類。

(女に) 一層不安になつたみたいなんです、あれを読んで。

次女 誰が、

長女 お父さん、

次女 何が書いてあつたん、

長女 今言われたようなこと。

次女 何、

長女 お母さんがほかの人のベッドで横になつとつたり、夜中も廊下を歩

いたり、

女 ここふた月、病院の先生には渡されなかつたらしいんです。

次女 何でまた、

長女 隠したかつた、

次女 病院の先生に、

長女 さあ。

女 そういう、いろんな行き違いが増えてきて。以前にも増して。

次女 ええ。

次女 あの、

女 お母さまの責任者を、お父さまではなく、(長女を指し) こちらの

娘さんなど、お願いしてきましたが、前々から。

長女 それは私からも何度も、父に。

次女 私からも。

長女 ええ。

次女 どうしてもきかなくて、父は。

長女 それさえできたらねえ。

長女 すみません、母の保険証やなんかを、父が渡さなくて、

女 保険証は本来、こちらでお預かりするものなのですが、

次女 (長女に) そうなん、

長女 (次女に) 無理に持つて帰つたって、お父さんが。

女 当方の負担も大きいんです、何度も申し上げたとおり。

長女 ええ、それは。

女 zoom でお父さまと面会したあとは、いつも以上に落ち着かなく

なるんです、お母さまは。

次女 はあ。

女 夕方から夜にかけて、特に。

長女 ええ。

ぞ」と、お母さまに迫って。

次女 はい。

女 退所は父のせい、なんですよね。

次女 はい。

次女 母の症状が重くなつたためではなくて。

次女 ええ。

父がおぼつかない足取りで、背を丸めてうろうろ歩き回つてている。

父 無いんぢやが。さがなんぼ搜さがしてもないんぢやが。

声1 何。

父 どこいやらにいつてしもで。

声1 何が。

父 何やら、あの、何やら。

声1 そりや、其筈そのはずだよ、小父たん。

父 よい(かけ声)、誰ぞ何ぞ言ふたか。

声1 (節をつけて) 垣根雀かきねすじめが閑古鳥そのへんれいをば

長う育てた其返禮くらやみに、

おのが首ツ玉喰かんてらひ切られてしまつた。

女 お父さまは、画面越しに写真や何かを見せて、「これ誰ぞ、これ誰

父 よい、

声1 気をつける、

父 何ぞう、

声1 気をつけろ、娘らが、

父 よい、誰ぞう、よい、

と、虚空に。

次女 あの、

次女 はい。

長女 母や、私たちは、どうしたら。

次女 父も高齢で、認知の方もだいぶん、

次女 私たちも仕事や自分の家があるし、つきつきり、というわけには、長女 それに、もう何も聞いてくれなくて、母は。私たちの言うことを。

次女 身支度も、トイレも、

数日後。父の家、すなわち長女・次女の実家である農家の居間  
(和室)。奥に仏壇。

父 どこに居るんぞ。どこいやつたんぞ。

長女 どこ、て。

父 お母さんを、どこに。

長女 聞いたんじやろ、お父さんも。

次女 もうトウリーハウスにはおらん。

父 ほぢやけん、

次女 退所させられた。

父 何、

次女 お父さんのせいで。

父 嘘つけ。

次女 嘘じやない。

長女 お母さんは、

父 お母さんはわしが看る。

長女 ほじやけん、それは無理、

次女 お母さんが家にある時分は、よう怒りよつたくせに。

父 怒りやかしやせん。

次女 お母さんはね、

父 何ぞう。

次女 もうほかの、施設に、

父 何、

長女 私が、

父 お母さんの書類、保険證やらがなけりや、

長女 介護保険証、介護保険負担割合証、医療保険証、病院の診察券。

父 お前、

長女 持ち出した、私が。

父 持ち出した、

長女 (仏壇を振り返り) 全部あの、仏さんの引き出しに、

父 お前、勝手に、

長女 責任者は私にしたけん。手続きも済ませた。

父、飛び上がる。

父、飛び上がる。

父 魂消たが。  
たまげ

次女 (長女を見て) 私らで相談して。

父 お前ら、結託して、

長女 結託、て。

次女 姉さんが何遍も、これまで何遍も言うてきたのに。

父 何を、

長女 どれだけ助かるか、て。責任者を、お母さんの後見を私にしてくれ

さえしたら、

次女 もっと早う、姉さんにしどつたら、こがなことには、

長女 お父さん。

父 何ぞう。

長女 前に言うたろがね。

父 何。

長女 忘れたら、

父 (怒って) 何を、

長女 「天皇も代替はりをしたけん、うちも代替はりをしようと思<sup>うんぢや</sup>」、

父 代替はり、

長女 あれは嘘じやつたん、

父 黙れ、頭が痛い。

長女 お父さん、

父 頭が痛い。言ふな。

次女 お父さん、

父 お母さんはどこに居るんだ。どこいやつたんぞ。

次女 言うたらまた、無理難題を言う、新しい施設の人。

長女 理屈の通らん要求をする。何十分も何時間もケアマネさんを引き止め  
て、

父 そがなことはせん。

次女 したじやないか。

長女 介護士さんやケアマネさんにも暴言を、

父 暴言、

長女 ほうよ。

父 誰が。

長女 お父さんが。

父 暴言やか言はん。

長女 言うた。

父 わしはただ、お母さんにもつとりハビリを頼む、て。特養を早う退院でけるやうに、て。

次女 もし今度退所させられたら、

長女 今度こそ無うなるけん、お母さんの行くとこ。

父 要望出して、何がいかんのぞ。

長女 うちにばつかりかかりきつとるわけにいかんから。

次女 向こうは忙<sup>せわ</sup>しいし。

父 規約に書いてあつたんぢや。

長女 応えようのない要望出して、相手の答えに満足せずに、何時間も事務所で粘る、そがな人がおつたらお父さん、どう思<sup>う</sup>、

父 そがなことはしてない。

次女 まだ言いよる。

長女 今までようがまんして対応してくれたと思う、トウリーハウスも。

父 お母さんは、今どこに、

長女 いつでも会いに行けるけん。

次女 お父さんが、私たちの言うこと聞いて、お母さんのこと任せてくれたら、いつでも。

父 お前ら、施設と結託して、

次女 出た、結託。

父 隠した。

長女 隠した、

父 お母さんを、どつか知らんとこに。

長女 何を、

次女 馬鹿な、

父 前代未聞ぢや。古々東西こがなことがあつたか。

次女 ないよ。

父 家庭崩壊よ。もう、家庭崩壊よ。

長女 誰のせいで、

次女 崩壊しとんはお父さんだけじや。

父 教へてくれ、どこに、

次女 ほじやけん、それは、

長女 第一、今はあれ、で、

父 見るだけでええんぢや、外から。

長女 行つたらそれじや済まんから。

次女 中に入ろうとする。

長女 中に入つて、言い張る。お母さんの責任者を自分に、と。

次女 くどくどと、延々と。

父 立つ。

長女 何、

父、仏壇の中をのぞき、振り向いて、

父 どこいやつたんぞ。

長女 ほじやけん、お母さんは、

父 何やら、あの、何やら、

長女 何。

父 お母さんは、

と、手のひらで口を覆っている。

長女、次女真似る。そのまま顔を見合わせる。

父 お母さんを、  
長女 マスクじやろ。

父 お前、また勝手に、

長女 使うたマスクじやろ、  
父 昨日、<sup>いちんち</sup>一日だけ、

次女 毎日換えないかんよ。

父 お母さんを、

次女 マスクじやろ。

父 お母さんを、

次女 マスクじやろ。

父 どして、

次女 どしても。

父 誰が決めたんぞ。

次女 決めたんじやのうて、そうせないかんの。

長女 あのマスクは使い捨て、

父 マスクぢやのうて、

長女 何。

父 お母さんを、

次女 さつきから言うように、

父 新聞は、

長女 新聞、

父、襖を開けて隣の部屋へ。

父、襖を開けて隣の部屋へ。

長女 捨てた、

父 捨てた、

長女 うん。

次女 もう十年も前の、

父 要るんだや。

長女 持つて行つた、

父 持つて行つた、

長女 半年前のなら、

父 どこい。

長女 納屋。

父 納屋、

長女 今度、資源ごみの日に、

父 何、

長女 何、

父 お母さんを、

長女 新聞じやろ。

父 取つてくる。

長女 ちょっと、

長女 前、

と、止めようとするが父は止まらない。玄関を出て家の脇の納屋へ。

寒風の吹きすさぶ音。

父 お母さんが家に居つた時分の、

声1 納屋に入つて、古新聞の束をほどいて何か選つている。

声2 冬の夜、シャツにステテコ、ガウンで。

長女 どこ行くん。

次女 何するん。

父 ここはわしの家ぢや。何しようと勝手ぢや。

父、隣の部屋に頭を突っ込んでいたが、振り返り、

父 どこいやつたんぞ。

父 どこいやつたんぞ。

父 どこいやつたんぞ。

父 お母さんを、

父 ほじやけん、お母さんは、

父 新聞。ここい積んどいたろが。

長女 そこにあうがね。

父 お母さんが、

長女 新聞じやろ。

父 もつと前の。

父 前、

長女 半年も、前の、

父 お母さんが家に居つた時分の、

長女 そがな古い、

父 倒れる前の、

声1 娘たちが結託して、大事なものを捨てた、と。

声2 結託、結託、結託と。

父を追つて納屋へ来る長女、次女。

長女 お父さん。

父 わしにやこがな娘はおらん。そがな顔、もう一度と見とうもない。

次女 お父さん、

父 頭が痛い。歸れ、歸つてくれ、何も土産はないが。

長女 お父さん、もう遅いし。

父 今宵は納屋で寝る。

と、寝そべる。

長女 こがな寒いとこ、寝たら死ぬよ。

父 死にやせんわい。お母さんが丈夫に産んでくれとるけん。

長女 そがな薄着で、

次女 最高血圧百八十。

長女 お父さん、死ぬけん、中に、家に入ろ。

父 責任者はわしだや、お母さんの。

長女 お父さん、

父 何でお前にせないかん。

長女 ほじやけんそれは、

父 お母さんを捜す、どうやつてでも。

次女 そがなことはでけん。

父 やつてみなわからん、でけるか、でけんか。

次女 お父さん、

父 突き止めてやる、どこまでいつても。

次女 突き止める、て、

父、古新聞の束を抱えて立ち、突きつけて、

父 納得のいくまで自分で調べて、そいから、行政。行政があかざつたら

司法、警察、

長女 お父さん、

父 見つけてみせる、お母さんを。

次女 あのね、

父 是非とも取り返して。

次女 お父さん。

父 何があつても、どこまでも。

長女 お父さん。

声1 リヤの小父たん、リヤの小父たん、待ツとくれよ。阿呆を伴れてツと

くれよ。

声1・声2 (節をつけて) 狐を人が捕つたなら、

それから、あんなお娘をも

縊め殺すのが定なれど、

おれの帽子ぢや繩さへ買へぬ、

それで阿呆は尾いて行く。

父 おゝ、おのれく、予が乗馬に鞍を置け。家來共を呼び集めい。

長女 え、

父 親の情を棄てゝしまはう。これほどにしてやつた父をば。馬の支度はどうした。

声1 驢馬が何疋もその支度にいつてるよ。

声2 七つ星の数は、七つしか無いといふ其理由が面白いや。

父 八つとは無いからであらうが。

声2 その通り。お前は立派に阿呆になれりア。

父 是非とも取り返して。おそろしい恩知らずめ。

声1 小父たん、お前がおれの阿呆だつたら、おら撲るよ。餘り早く齡を取つたから。

父 どうして。

声1 聰明にもならんうちに齡を取るやつがあるもんかい。

父 おゝ、天よ、氣ちがひにならせて下さるな、氣ちがひに。正氣にしておいて下され。氣ちがひにはなりたくない、氣ちがひには。

声1・2 出來ましてございます。

父 さア、來い。

長女・次女 お父さん、

父、納屋から自転車を引き出す。古新聞の束を自転車のカゴに載せ、自転車に乗つてしばしぐるぐる回る。

父 おゝ、天にまします神々、もし神々にして老人を憎みたまばづば、これをば餘所事とばし思し召さるな。御使ひ神をお下しあつて、何卒お見方くだされい。(娘たちに) やい、おのれ、此髭を見ても恥ぢをらんか。

次女 鬚なんかないじゃないか。

声1 冬はまだ去ッちまはないなア、雁がそッちへ飛ぶやうぢやア。

父 おゝ、癪が、此胸先きへ。ヒステリカ・パッショーメ、下れ、汝、沸き上る心の悩み、汝の居處は下ぢやわい。

長女、次女、自転車を乗り回す父をせんかたなく見てゐる。

声1 次から次へと、

声2 昼夜間なしに、

どうぢや、馬の支度は出來たか。

声1 ようもまあ、

声2 突飛でひどいことをする。

声1 一日中電話をかけまくる、

声2 郵便局長、村の保健師、農協の営業マン、

声1 親類、教え子、誰彼かまわす。

父 お母さんの居るところを聞いたんだや。

声1 自転車でふらふら遠出して、

声2 峰を越えて、えつちらおつちら、

声1 見知らぬ施設に入り込んで、何やかや聞いたりする。

声2 包括支援センターの人に迎えに行かせる。

父 お母さんが居るかと思たんだや、あそこに。

次女 あれやこれやと私たちを責める。

長女 筋が通つてないけん、返事の仕様もない。

次女 しようことなしに黙つとつたら、

父 何ぞ言ふことはないんか、

次女 て、また怒る。

長女 言うことは山ほどあるけど、

次女 聞きやせん、何言うても。

長女 思い込みがころころ変わる。

次女 ほいですぐに忘れる。

声1 始末に負えん、

声2 愚かな年寄りは。

長女 代替わりのなんの言いよつたくせに、

次女 ありもせん権力ふりまわして。

声1 わめいたり、

声2 夜中に外をうろついたり。

声1 包丁まで出そうとしたり、

次女 壊れていく。

長女 お父さんが。

次女 私らも壊れていきそくな、一緒に。

次女 それを見て、ますますお父さんが。

父 もう崩壊よ。家庭崩壊よ。

次女 崩壊しどんはお父さんだけじや。

父 わしは誰ぞ。わしは誰か、それが知りたい。

長女 お父さんじやろ、これも。

父、いつしか自転車を停め、杖を手に、

長女 言うことは山ほどあるけど、

次女 聞きやせん、何言うても。

長女 思い込みがころころ変わる。

次女 ほいですぐに忘れる。

声1 始末に負えん、

父 わしがこがに腰曲げてのろのろ歩くか。こがにゆつくりしかようもの  
言はんか。なんもかも、わしがわしのいうことをきかん。朝が来て、  
晝になつて、日が暮れても、目が醒めんままぼーっとしとる。さうか  
と思や、夜中も目が冴えて冴えて。誰か居らんのか、教へてくれる者もん

が。わしは誰ぞ。

声1 王の影法師。

父 十四で親父が死んでから八十年、ずうつとこの家の家長ぢや。舊制中學出て師範學校に上がつて村で先生になつて校長にもなつて定年まで。縁あって鄰村となりから嫁さんもうて長女と次女が。いや、そがなことは全部見せかけて、自分にや孝行な娘があると思ひ込んだだけかも知れん。

声1 跡取り、家長、先生、校長。

声2 年取つてもいつまでも元気なね、先生。

長女 まわりから、褒め言葉だけを浴びて、九十四年間生きてきた。

次女 非難がましい言葉、マイナスの評価はスルー。

長女 それが長寿の秘訣。

父 お前らはわしの娘か。

長女 賴むけん、私らの言うことを、ちいとでもええけん、ちゃんと聞いて。

次女 誰が見ても、理屈がとおらんことばあい言いよんじやけん。

長女 親類中の、近所中の、村中の人々が、誰が聞いても、

次女 賴むけん。年とつどんのに、体も動かんのに、気持ちだけ昔のままの

長女 もつと年寄りらしゅうに、

次女 本氣で言ひよんか。

父 考へたことあるんか。

次女 何。

父 じきに年寄りぞ、お前らぢやて。

次女 わかつとるよ、そがなことは。

長女 私らももう還暦さかねいじや。

父 どがな氣持ちがするか。自分がおんなじこと娘から言はれたら、

長女・次女 お父さん。

父 何ぞう、口揃そろへて、

長女・次女 お父さん、

父 結託して、

長女・次女 結託、

父 子どもの時分は、お前ら、喧嘩けんかばあい、

長女 そがな昔のこと、

父 どつちがお母さんの手伝ひをしたの、せんの、

長女・次女 お父さん、

父 ひとの物を勝手に使うたの使はんの何の、

長女・次女 お父さん、

父 結託するんなら、なしゃ（なぜ）、あの時分に、

次女 お父さん。

父 何ぞ。

次女 姉さんが家を片付けて、度々掃除もしてくれて、ご飯も作りに来てく

れたけん、これまでやつてこれたんじや。もう一回姉さんに、

父、膝を折り、

父 我女よ、わしは<sup>とし</sup>齡を取つてゐます、老人は無用なもんぢや、斯<sup>か</sup>う膝を

突いてお願ひする、どうぞ<sup>きもの</sup>著物を下さい、寝床を、<sup>くひもの</sup>食物を。

長女 お父さん、

次女 やめて、

父 見い、これが家長たる者に似合ふか。

長女 お父さん、

父 お前らに頼るくらゐなら、もう、このまま外に、

次女 ちょっと、

父 凍え死んでも、

長女 お父さん、

父 賴むけん、もう頼むけん。

次女 お父さん、

父 氣違ひにはなりたないんぢや。わしを氣違ひにするな。

次女 また、それを。

父 わしは誰ぢや。誰ぞ教へてくれ。

長女 ほじやけんお父さんはお父さんぢやろ、

声1 分別が昏睡しても。

父 もはやお前らの父ではない。  
声2 そうかも。

父 お前らの父は、こう杖をついたり背中を丸めたりはして居らぬ。  
長女 そういうことじやのうて。

父 わしは誰ぢや、誰ぞ教へてくれ、さあ、誰ぢや。

長女 お父さんぢやないお父さん。

父 お父さんぢやないお父さん。  
長女 出口がみつけられない。ぐるぐる彷徨つて、

父 出口、

長女 うん。

父 探しよんは入り口ぢや。

長女 入り口。

父 施設の、

次女 お母さんなら、

父 納屋の、

長女 納屋なら、

父 行方不明ぢや。もう行方不明よ。

長女 あそこに、

と、納屋を指す。

父 お母さんが、

次女 お母さんは、

父 どこに居るんだや。

長女 何遍も言うたように、

父 行方不明ぢや。家庭崩壊ぢや。前代未聞よ。

次女 ほじやけん、

父 出口は、

長女 入り口じやろ、探しよるんは、

父 あるんか。

次女 何。

父 あつたら教へてくれ。

長女 何が。

父 出口。

次女 入り口じやろ。

父 出口も、入り口も。

次女 ないかも、しれんけど。

父 ほれみい。

長女 とつかかりくらいはある。

父 とつかかり、

長女 と、思つ、けど。

父 けど、

長女 見ようとせん、そこにあるとつかかりを。

父 見ようとせん、

長女 そう。

父 誰が、

長女 お父さんが、

父 そがなことはない。

次女 同じところをぐるぐると、

声1・声2 ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる。

父 もうここら、道歩きよる人もほとんど居らん。みな、何やら、あの、

何やら、口に、

次女 マスク、

父 マスク。ほうよ。マスクしとる。マスクしとらん人は居らん。

次女 どこでもそうよ、今は、

父 どこの誰やら。顔も、

長女 わからんね。

父 誰あれも「先生」やか言うてくれん。

声1 教え子たちにも、あれほど慕われたのに。

声2 志 ある田舎教師の面影は、もう、どこにも。

長女 同級生のおじいさんらとも、仲良かつたのに、

父 もう今は、四人しか、

次女 うん。

父 みな体が弱つて連れ合ひも亡うなつて。家で寝とるか、施設に入つと  
るか。

長女 ああ。

父 杉山の小夜子も、入院して長いが、もう物は食べいで、点滴して、

次女 会えたん、叔母さんに。

父 いや、会へん。

長女 今はね、どこの病院も、

父 見舞ひに行たら看護婦が出てきて、丁寧に説明してくれたが。小夜子  
も、もう、いよいよ いかんやうなけん。

次女 うん。

父 坂口も、「義兄さん、義兄さん」と言ふてくれたが、亡うなつてしまつて。

長女 お気の毒じやつたね、坂口のおいさん。

父 お母さんでも家に居つてくれたら、話 でけるのに。ああぢやつた、  
こうぢやつた、ゆうて。

次女 ほうじやね。

父 誰もかれも亡うなつてしまつた、て。

声1 広い台所に一人。  
声2 足元から夕闇に沈んでいく。

声1 納屋には一年分の米。

父 ほぢやのに炊飯ジャーには一粒の飯もない。

声1 畑には大根、白菜、ジャガイモ。

父 穫りに行く氣力も失せ、  
声2 何とかこなしていた煮炊きも、

父 何もかも、わからんやうになつてしまつた。

声1 瓶の蓋を開けたら閉めない。

声2 冷蔵庫の中のものを取り出したら元に戻さない。

声1 米を研いで炊飯器に、そしてスイッチを、

声2 たつたそれだけのこと、のハードルが上がつて、

父 いつつも焦げる、鍋が。

声1 点火したまま忘れている。

声2 焦がした鍋、のころがる、焦げ臭い匂いの台所。

父 食ふもんがない、もう口い暮れたのに。

声1 テレビの料理番組、メモをとつてゐるつもりが、

声2 手も字も震えている。

声1 娘らへの言い分を手紙にしたためたつもりの、

声2 意味が通らない文章。

声1 飲みさしのペットボトルや蓋、居間に台所にあちこちに。

声2 宅配の弁当、中身が中途半端に残つて、蓋を開けたままテーブルに置  
きつ放し。

父 娘らが來ては、勝手にものをいちつて歸つていく。掃除やら洗濯やら  
片付けやら言つて。あげく、あれも無い、これも無いなつとる。あれ  
はどこいったんぞ、どこいやつたんぞ。

長女 夏冬の衣替えも、布団干しも、全部してあげて、私が。

父 食ふもんがないんだや、どうしたらええかわからんのぢや。お母さん

に助けてもらひたいんだや。特養を「退院」させて、元どほり一緒に静

かに暮らしたいんぢや。

長女 ほじやけんそれは、

次女 無理。

長女 どしてわかつてくれんの。

父 まるで手負ひの獣を見るやうに、わしを。娘らは。

声1 細く開けた戸の隙間から、

声2 目ばかりのぞかせたガラス窓から、

声1 ひつそりと様子を伺うご近所。

長女 終わりのないくどくど。

次女 自分の言いたいことだけ、滔々と、

声1 ネバーエンディングストーリー。

声2 口を挟めば怒る。

声1 顔が変わつてしまつた。

声2 わざかばかりの間に、

次女 (父に) まあいつぺん映してみとん、

父 何、

長女 鏡に。

長女 いつの間に、こがな、

次女 歯あ食いしばつて、

長女 見たこともない悪相に、

声1 落ちくぼんだ目。らんらんと光つて、

声2 尖つた顎と耳、顔色は妙に艶々。

声1 夜中まで電気を煌々と、

声2 眠つているのかいないのか、

声1 朝もまだ暗いうちから、

声2 悪態を。

声1 噛み付かんばかりに。

声2 むき出しの、凄まじい負のエネルギー。

次女 あんな狂氣と敵意、これまで一体、どこに、

長女 今にも卒倒しそう。しかしその気配もなく、

父 はよ言へ、言はんかい。お母さんを、どこに、

父、杖でバンバン地面を叩く。

父 娘らが、道のあつち側に。きよろきよろと、目え合はさうともせずに。

車の通り過ぎる音、クラクションなど。

父 鏡

父 はよ言へ、言はんかい。

長女 お父さん、

父 お母さんを、どこい、

次女 危ない、車が。

長女 輪かれるよ。

父 言へ、言はんかい。お母さんを、どこに、

長女 行こ、お父さん。

父 お母さんのどこか。

長女 病院。

次女 いつへん、ようく診てもうて、

父 どつこも悪ないぞ、わしや。

声1 かかりつけ医にも、福祉のプロたちにも相談したが、

声2 正解は、どこにも。

長女 溺れている、私たちみんな。

次女 足が立つはずの浅瀬で。

声1 払いのける。

声2 はねつける。

声1 あちこちから差し伸べられる、手を。

声2 牙をむいて。

長女 もう知れ渡つてしまた、村中に。

次女 前にうちでいつつもよその噂話しよつたように、今はうちがよそにあ

父 何を、

れこれ言われよる。

長女 何とか手を考えんと。

次女 手、

長女 うん。

次女 あるん、手。

長女 ない。

次女 ない。

長女 ないよ。包括にも役場にも、相談でけるところにはもう全部相談した。

次女 うん、

長女 あとは。

次女 あとは、

長女 うん。

次女 姉さん、

長女 何。

次女 いつそ、

長女 うん、

やがてぴーぽぴーぽと音がする。

救急隊員の男と女、担架を持ってやってくる。

救急隊員たち、父の脈を調べ、熱、血圧を測るなどする。

計器を示しつつ父に、

長女 もうこれ以上はどうしようもない。  
次女 ああ。

長女 私らはまだ我慢するとして、  
次女 無理、限界。  
長女 よそにどんな迷惑が、  
次女 うん。

長女 お母さんにも、  
次女 うん。

男 ごらんください、  
女 脈が飛んでいます。

長女 大変なことに、  
次女 今すぐ入院しないと、  
長女 ね、お父さん、  
次女 言うたとおりじゃろ、

救急隊員たち、父を担架に載せようと引きずる。

父 父、娘たちの腕を掴む。

長女 うちの恥にはなるけど、警察にも連絡をして、

父 乗るもんか。  
長女 お父さん、  
次女 せつかく、

長女 やめて。爪がくいこむ、  
父 眼鏡はづしてみい。殴なぐつてやるけん。

救急隊員たち、去る。

父 わしを氣違ひにするな。どうぞ、わしを狂人きちがひにさせてくれるな。

次女 お父さん、

父 お前らには頼まん、もうこれぎりぢや。一度と會はん、元氣で長生き

してくれ。

長女 お父さん、

父 神さま、仏さま、お助けください。どこまでも、どうやつてでもやつ

てやる。

長女 何を、

父 何でもよからが。わしは何も怖ない。

長女 お父さん、

父 捜し出してみせる、お母さんを。何があつても、どこまでも。

次女 お父さん、

父 我女、どうぞ俺を狂人にさせてくれるな。最早厄介は掛けん。さやう

父 なら。もう二度とは逢ふまい、又と顔を見ることはすまい。と言つて

父 お父さん、 どうぞ俺を狂人にさせてくれるな。最早厄介は掛けん。さやう

父 なら。もう二度とは逢ふまい、又と顔を見ることはすまい。と言つて

父 お父さん、 どうぞ俺を狂人にさせてくれるな。最早厄介は掛けん。さやう

父 なら。もう二度とは逢ふまい、又と顔を見ることはすまい。と言つて

父 お父さん、 どうぞ俺を狂人にさせてくれるな。最早厄介は掛けん。さやう

父 お父さん、 どうぞ俺を狂人にさせてくれるな。最早厄介は掛けん。さやう

父 おゝ、天の神々よ、忍耐を賜りませ、必要な忍耐を。これ、御覽せよ、

神々、齡も積り悲しみも積つて、見るも哀れな此あさましい老人をば。  
これなる女児共を父に叛かしめられますは、尊神がたの御意でござ  
るか。

次女 お父さん、

父 捜し出してみせる、お母さんを。何があつても、どこまでも。今に

爲返しをしてくれる、怖ろしいことをしてくれる、全世界が、どんな

事かまだ解らんが、世界中を怖れ戦をのかすやうな事をしてくれる。

長女 お父さん、

父 おのれらは俺が泣くだらうと思ひをらうが、いや、俺は泣かぬわ

い。泣きたうてならぬけれども、おのれ、泣く位まならば、此心臓

をば千萬片に引裂ひきちぎつてくれうわい。おゝ、阿呆よ、俺ア狂人になりさ35

さうぢや。

長女・次女 お父さん、

父、杖を手に、荒野ヒースへ。寒風の吹きすさぶ音。

父、けれども俺はおのしを呪ふまい。改心の出來る時が來たら、改心

せい、其そうち、とツくりと考へて、善人になれ。

長女 何を、

次女 勝手な

声2 小父たん、お歸りよ。女児さんにお祝福むすめをしてお貰ひよ。

いのり

父 吹けい、風よ、おのれが頬を破れ。荒れ廻れ。天地を震動する霹靂いからしよ、

恩知らずを造るありとあらゆる物の種うもつぶを打潰ひしてくれい。

声1 おゝ、小父たん、乾いてる邸やしきのお聖水みづのはうが、此戸外このそとの雨水より

父 思ふ存分に吹け。吐け火を。噴け水を。<sup>ふ</sup>

父、荒野をよたよたと彷徨う。<sup>さまよ</sup>寒風の吹きすさぶ音。

ヒース

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

ナ

声1 杖にすがつてふらふらと、誰

声2 家の近くで、あわや遭難。

声1 懐中電灯を手に、後をついて歩く長女、

声2 あとからジャンパーを手に追いつく次女。

声1・2 あぜ道を巡る二つの影法師。

長女、次女、父に並び寄り添う。

長女 こがな夜中に、

父 まだ十二時にやなつとらせん。

次女 真冬の、

父 まだ十二月ぢや。

長女 こがに冷える晩に。

父 わしは二月生まれぢやけん、

長女 杖ついて。

次女 そがによぼよぼと。

長女 つい、こけでもしたら、

次女 用水路にでも、落ち込んだら、

父 そがなことはもうどうでもええ。

次女 どうでもええことないよ。

父 お前らと話がしたいんだぢや。

長女 誰。

父 うん、

次女 今、目の前におるこの人は誰なん。

父 誰で、お父さんよ。

長女 違う。

父 違はん。

次女 顔が変わつてしまふ。

父 ほうよ、狂人ぢや。もう狂人よ。

次女 声も、前とは、

長女 ほいでもこのセーターは、

次女 うん、

長女 いつやら、お母さんの編んだ、

父 聲が、したんぢや。

次女 え。

父 誰やら外で、呼びよるやうな、

長女 何のこと。

次女 声。

父 ほうよ。

長女 どんな、

父 どんなで。

次女 名前を、

父 いや。

長女 何、

父 お父さん、お父さん、て。

次女 お父さん、て、このお父さん、

長女 呼ぶ、て、誰が。

父 わからん。

次女 お母さん、

父 おお。

長女 そんなはず、

父 確かに。

長女 お母さんは、  
父 わしは外に出た。こえ聲のした方に、

次女 ジャンパーも着ずに。

父 温いけん、セーターが。

長女 帽子もかぶらず手袋もせずに、

父 聲は闇の中から頻りに自分を招く。はじめは氣のせゐか、狸にでも化

かされどるんかもわからんと思たが、

長女 狸。

次女 二十一世紀に、狸。

父 二十一世紀でも、三世紀でも、狸は居る。を

長女 里にはおらん、明治でも、大正でも。

父 何の話ぢやつたかいの。

長女 うん、

父 狸の、

次女 何やら、声が、

父 ああ。

次女 で。

父 呼ぶんぢや、何遍も、何遍も。

長女 お父さん、お父さん、て、

父 おお。

長女 その、お父さん、て、

父 うん、

長女 この、お父さんのことなん、

父 さうに決まつところが。

次女 世間にお父さんは大勢おる。

父 さうかも知れんが。

長女 ほいで、どしたん。

父 何。

長女 声に、呼ばれて。

父 外に、出た。

次女 ジャンパーも着ずに。

父 走り出した。

長女 走る、

父 おお。

長女 誰が、

父 聲の、する方に。無我夢中で。

次女 お父さん、

父 うん、

長女 杖は、

父 山に入つとつた。いつか、知らん間に。<sup>ま</sup>

次女 山。

父 おお。

長女 どこの。

父 どことも知らん、行つたこともないやうな、深い、

長女 杖ついて。

父 杖、

次女 歩けもでけんから、杖なかつたら。

父 知らん間に、手えを地べたにつけて、

長女・次女 え。

父 走りよつた。四つ足で。

長女 寝言を、

父 道もない、木々の間を、風がびゅうびゅう走り抜けて、枝が頬をはじ

く。この世のどんな獣よりも速うに。どこまで行つても息も切れん。

次女 夢、

父 内臓も皿も骨も、四本の脚の筋肉も新しうに生まれ變はつて、氣いついたら手足にや毛が、顔にや髭が。夜明けがきてうつすらと光が射し始めた頃に、谷川に顔を映してみたら、もうわしは、

長女 どう、

次女 なつたん、

父 これは夢ぢや、と。

次女 やつぱり。

父 ついうとうとして、自分の鼾で目え覺めたら、ついさつきまでおつたお母さんは消えて、自分一人だけ、夜中の臺所に座つとる、と云ふやうな。

次女 そがな、夢を。

父 五十年前に亡うなつたわしのお母さん、八十年前に亡うなつたお父さん、戦争が終はつてわしが學徒動員からもんたら、お祖母さんが、蚊帳の中に。

長女 蚊帳、

父 寝付いとつて、わしの顔見て、ほんの何日かして逝つしもた。あの、  
金山からきた、

次女 お祖母さん、

長女 ひい祖母さん、私らの。

父 さういふ人らに圍まれて、これは夢、とわかつとる夢。

長女 そがな、夢も。

父 どがなことでも起ころ。この世の中は、どがなことでも起ころ。九

十三年生きてきて、ただの一回も経験したことがなかつたやうなこと

も。

長女 九十四になつたろ、こないだ。

父 何でも起ころ。あがな、見たことも聞いたこともない疫病が流行つて、

六十五年も連れ添ふた夫婦が、會へんやうになる、そがな、ありえんやうなことも。

長女 お父さん、

父 何でこがなことに。この世もあの世もわからんことばあいぢや。

次女 お父さん、

長女 お父さん、

父 黙れ。やかましい、黙れ。

長女・次女 お父さん。

父 生まれて、多少世の中のことがわかるやうになつた頃にはもう戦争が

始まつて、十四の歳に親父が病氣で亡うなつて、世の中は戦争一色になつて、いづれはわしも征かんならん、と。

長女 ほうじやね。

父 人でも牛でも馬でも、獸でも、理屈も理由も無う押し付けられたもんを大人しうに受け取つて生きていくんがこの世の定めぢや、と。かれ

長女 百年、  
次女 九十四年じやろ。

父 わしがどがな悪いことをしたと云ふんぢや。

次女 お父さん、  
父 それが、こがな狂人に。

次女 お父さん、  
父 もう死のかい、と思たけんど。

次女 お父さん、  
父 腹は減る。

長女・次女 腹、  
父 何やら、目の前を、

長女・次女 腹、  
父 白いもんが。

長女・次女 腹、  
父 走つて、消えた。

長女 消えた、  
父 向つこの、藪に。その途端、わしはわけがわからんやうになつた。氣

いついたらわしの口が、いや顔中が、ぬるぬると、

長女・次女 ぬるぬる、  
父 生臭うて。かう、拭うて見たら、

次女 見たら、

父 かう、血いらしいもんが、

長女 血。

父 あたりにや毛が散らばつとる。

次女 毛。

父 うさぎ、らしかつた。

長女 うさぎ。

次女 うさぎ年じやけん。

長女 千支は関係なかろ。

父 そいから狐に狸に、そのうち猪まで。

長女 イノシシ。

次女 お母さんは亥年じや。

長女 ほじやけん、千支は、

父 これ以上は、到底言へんが、

長女 もうだいたい聞いたよ。

次女 ねえ。

父 ほぢやけんいちんちど一日のうちでたいがい何時間かは、元の、

長女 元の、

父 人間の心が還つてくる。

長女 人間の。

次女 心。

父 さう云ふときには人と話も、でけんことはない。かうやつて、  
長女 嘛み付くような話し方、

父 何。

長女 いや、

父 何ぞ。

次女 つじつまの合わん話、

父 そがなことはない。

長女 わからんの、自分で、

父 はつきりしとる、わしは、

次女 返事のしようのない話。

父 返事ぐらゐ、

長女 理屈もとおらんけん、返事のしようがない。

父 どこが違ちがうとるか、言いつたらええぢやないか。

長女 怒るじやないか、「違ちがう」言いつたら。

父 怒つたりはせん。

次女 しようがないけん黙つとつたら、なしや黙つとんぞ、いうてまた怒る。

父 字も文も書けるぞ、まだ。

長女 何が書いてあるんかわからん。

父 わからんのはお前らの方ぢや。

長女・次女 お父さん。

父 わしは前と何も變かはらんかろが。かうやつて人が話す言葉で話しよる

し、日記も付けるし、難しい文も書けるし、孫や親類に米や野菜も送つてやれる。

長女 自分が何を言うて何をしたんか、気いつかんの、

次女 なるべく見んように、気いつかんようにしとるんじやろ。

父 おゝ。

長女 認めるん、

父 それまでは、どしてこがな獸になつてしまもんぢやろ、と思ひよつた  
んが、ひよいと氣いついたら、何で前は人間ぢやつたんぢやろか、と思たりする。

長女 誰も助けられん。お父さんが自分でとどまろうとせんかぎり。  
父 助けてやか、いらん。

次女 また。

父 獣にやかなつとらん。

長女 今、自分で、

父 恐ろしい。

長女・次女 え。

父 そのうちに、元は人間ぢやつたことを忘れてしまう。

長女 ほうじやね。

父 この氣持ちは誰にもわからん。

次女 また。

長女 ひとり決めして。

父 助けてくれ、と言ひたいが、

長女 言うたらええじやないか。

父 言ひたいが、

長女 誰も助けられん、お父さんが自分で言わな。

父 助けてもらはうとは思わん。

次女 プライド。

父 何。

次女 自尊心。

父 何のことぞ。

次女 年寄りを馬鹿にしよつたろ、ずうつと。あれがどうならい、言うて。

父 あがに歳をとつてしまつて、近所の誰彼のことを、

父 そがなことは、

次女 ほじやけん自分がほんとの年寄りになつて、人に馬鹿にされるんが恐ろしい。

長女 人に弱みを見せんように、困りごとも人に知られんように、

次女 「うちは何一つ世間に恥ぢるところがない立派な家ぢや」、

長女 「自分はこがに年取つても、どつこも悪いところがない元気な人間ぢや」と。

次女 思いたいんはわかるけど、

長女 私らの話も医者の話も、

次女 みなが心配してくれよるのに、

長女 役場の保健師さんの話も

次女 包括センターの人らの話も、

長女 みな気遣うて、

次女 心配して言うてくれよるのに、

長女 大事なところは聞き流して、

次女 無視して、

長女 耳に触る話には喧嘩腰で、

次女 その間に、姿形の方が変わつてしまた。

父 のう、

長女・次女 何、

父 わしは、一体どうしたら、

長女 自分に向き合うんよ、現実の自分に、ケモノになつてしまた自分に、

父 お前。

長女 何、

父 そがな偉さうなことが言へるんか、お前に。

長女 言えんよ。

父 ほれみい。

長女 言えんけど今は言うしかない。それしか道は、

父 堪らん、もう堪らん。

次女 お父さん、

父 赤子の時分から朝夕見てきた、あの向つこの山のてつへんに駆け上が

つて、吠える。心ゆくまで吠えたいと、思ひの丈を絞つて、吠える。誰かにわかつて慾しい、誰かに。

長女 誰か、ゆうても、

父 ほぢやけんど人も獸も、恐れて深う引つ込んで出ては來ん。怒り猛り

狂うた虎が、いつまでも吠えよる、と。

長女・次女 お父さん、

父 月に向かうて吠えてみても、谷底に向かうて吠えてみても、誰も、誰

一人わしの気持ちをわかつてはくれん。

長女 何を、感傷的な、

次女 甘えたようなことを、

父 夜が明ける。わしはもうつけまた獸に戻る。その姿を間近でお前らに

見られとうはない。

長女 私らじやて見とうはない。

父 ただ、お母さんのことだけは、くれぐれも。

次女 山のてつへんから吠えたら聞かれるよ、お母さんにも。

父 お母さんはわしが獸になつたとは夢にも思とらん。もうほんと何

にもわからん、とはいへ。

長女 そがなことない、わかるよ。

次女 寂しいよ、お母さんじやて。

父 お母さんには言ふなよ、わしが獸になつたことを。それだけは頼むけ

ん。

長女 お父さん。

父 うん。

長女 泣きよん。

父 何、

次女 泣きよん。

父 泣きやせん。

長女 うん。

父 泣くわけなかろが。

長女 うん。

父 ほんならこれで。

長女・次女 お父さん。

父 二度と来るな。

次女 どして。

父 だんだん、いろんなことがわからんやうになつて、

次女 うん、

父 次はあんたらとは知らずに喰うてしまふかも知れん。

次女 ああ、

父 家に歸つたら、この山のてつべんを~~碧玉~~遠鏡でのぞいてくれ。

長女 何で。

長女 お父さん。

父 うん。

長女 泣きよん。

父 何、

次女 泣きよん。

父 泣いたりするもんかい。

長女 泣きよん。

(終わり)

〈引用・参照文献〉

- 『新修シェークスピア全集 第三十巻 リヤ王』坪内逍遙譯、中央公論社、一九三四年（父、および声1、2のせりふの一部で引用、参照。）
- 「微生物感染がアルツハイマー病の引き金に？」『Nature ダイジェスト』二月号（SPRINGER NATURE）（五頁、声のせりふで引用、参照。）
- 「認知症新薬、国内承認の結論は年末か『夢の薬か審査』」、『朝日新聞デジタル』「医療サイト 朝日アピタル」二〇一二年六月八日、および、  
「認知症の新治療薬、割れる評価『リスクより利益高い』」同右 六月九日  
(五頁、声1、2のせりふで引用、参照。)
- 「認知症の行方不明者、最多を更新 地域で搜索の枠組みも」『朝日新聞デジタル』「医療サイト 朝日アピタル」二〇一二年六月二十四日  
(三十二頁、声のせりふで引用、参照。)

〈参照文献〉

- 「山月記」、『山月記・李陵他九篇』中島敦著 岩波文庫（一九九四年）
- 『リア王』シェイクスピア著、野島秀勝訳 岩波文庫（二〇〇〇年）ほか